三　防災の取り組み

昭和の南海大地震、大正の大洪水

平成二三年三月の東日本大震災（東北地方太平洋沖地震）以来、地震に対する状況は大きく変わり、更に同二八年四月の熊本地震が追い打ちをかけた。いつどこで発生するかわからない巨大地震に備える意識が高まっており、特に南海トラフ地震が予測される地域は特別である。地震国といわれる日本にあって平安時代以来、徳島県に被害をもたらした地震は、理科年表によるとマグニチュード七以上で二〇回近い。なかでも南海地震は、白鳳地震（六八四年）、仁和地震（八八七年）、康和地震（一〇九九年）、正平地震（一三六一年）、慶長地震（一六〇五年）、宝永地震（一七〇七年）、安政地震（一八五四年）、昭和南海地震（一九四六年）など多発している。

江戸時代以降に起こった特に大きい地震は、マグニチュード八・四の宝永地震と安政地震である。安政地震の徳島の震度は五・六で断続的に七日間続いたと伝えられている。北島町では、連日にわたる大地震に人々は家を飛び出し、藪などに避難して貧富の差もなく野宿し、飢えと渇きに苦しんだ。人命を失うことはなかったが、田畑に亀裂が入り、水路の埋没や家屋の倒壊も少なくなかったという。

そして昭和二一年、マグニチュード八・〇の昭和南海地震は津波を伴い、西日本一帯に大災害をもたらした。北島町教育委員会が平成二四年に町内で聞き取り調査を行ったところ、立って歩けないほどの揺れで、北島南小学校の講堂が倒壊、住居や納屋が倒壊、地面に亀裂や液状化、堤防にひびが入るなどの被害があったが、火災は発生していなかった。しかし、徳島県や高知県の沿岸では津波による被害が大きく、徳島県では死者・行方不明者が二〇〇人を超えるほどであった。

災害は地震だけではなく、川に囲まれた北島町では洪水の被害も大きい。吉野川の堤防工事が完成するまで水害に見舞われることはたびたびであった。江戸時代の記録では、洪水で田畑が川となって神社の祭礼が一切できなかったり、堤防が決壊して作物が損害を受けたり、家の流失数十戸、死者数十人などの被害が散見される。

北島町で忘れてはならない災害として、町全体が被害を受けた大正元年（一九一二）の大洪水がある。九月二一～二二日、徳島県南岸から阪神に上陸した台風は多くの死者を出すなど、全国的な災害となるほどで、徳島では二一日昼から翌日早朝までに六〇〇㍉を超える雨量のところもあり、沿岸部では高潮の被害があった。県内の死者八一人、床下・床上浸水四万三〇六七棟、板野郡では二七人が亡くなった。吉野川の出水は徳島市で七・五㍍、板野郡では水田面上三㍍に達した。北島町では町を囲む二つの川の各所で堤防が決壊し、場所によっては三㍍を超える浸水となった。

町は当時の大災害の状況を伝えて防災意識につなげるために、その場所の海抜高と大正の大洪水の浸水高さ（浸水深さ）を示す海抜柱・海抜表示板をつくることとし、平成二〇年、役場総合庁舎前駐車場に第一本目の海抜柱を設置した。その後、町内の各小学校などに海抜柱、町内各所に海抜表示板が設置されていった。浸水高さは三木ガーデン歴史資料館にある大正元年の大洪水の冠水位を基礎資料としている。

北島町の防災対策

災害に対して一般に防災は被害を出さないことを目指す総合的な取り組みをいい、減災は想定した被害をできる限り減らす取り組みをいう。災害が発生することは避けられないことから、北島町では防災・減災の両面から